

第2回全体研究会・結果報告

一宮真佐子（グローバル COE 研究員）

2009年2月18日、15時よりフィールド調査班主催第2回全体研究会が行われ、延べ50名以上の方が参加され、予想以上の盛況となりました。まず研究部門責任者の押川文子先生より全体研究会の趣旨について、続いてフィールド調査班班長・秋津元輝先生から今回の説明がなされました。

第一報告は次世代研究ユニット研究の「移動する家族の生活史—旧産炭地を事例として」から、永吉守・井上博登・木村至聖三氏が分担して報告され、形式的にもユニークでした。共同研究者6名に加えNPO法人の協力も得ておられ、共同研究の進め方、プロジェクト設定の参考にもなりました。永吉氏はNPO活動と事例の研究上の位置づけをご報告されました。三池炭鉱での長年の聞き取りのなかで、事故や争議といった社会的に注目される出来事よりも当時の生活の記憶が語られることから、炭鉱社会における人間関係を取り上げられたこと、また、近年の産業遺産への関心の高まりを背景として親密圏での「記憶」が公共圏としての「語り」に変化していく過程に着目されたとのことでした。木村氏からは調査によって明らかになった①グローバルな「移動」②九州圏内でのローカルな「移動」③炭鉱地域でのローカルな「移動」のうち、今回は③について、「記憶」の語りの具体例が紹介され、コミュニティの中での変容、その変化に対応する家族の変容があることを明らかにされました。井上氏は端島炭鉱と周辺集落についての「語り」を中心としてご報告され、端島の社宅コミュニティにおける濃密な近所づきあいとともに炭鉱と周辺村落との相互関係についても取り上げられ、炭鉱地域内に留まらない社会関係の広がり・状況変化への対応があることを明らかにされました。質疑応答では、事例に出てこなかった三池の第一組合と組合関係者のその後、インフォーマントのサンプリング、記憶の社会化への抵抗について質問がなされました。

第二報告はタイ・タマサート大学からの客員教授 Duangjai Lortanavanit 先生より「自由化と資源収奪—北タイの村におけるツーリズム活動を事例として—」としてご報告いただきました。10年以上にわたって北部タイのメホンソン市とパイ市での観光開発を調査されています。タイでは90年後半に持続可能観光という概念が広まり、その後の変化に着目されています。メホンソン市の観光開発は80年代半ばから中央行政主導で始まっていましたが、90年代後半に観光開発政策が変化し、NGO主導の開発や分権化した地方行政主導の開発が登場します。パイ市の観光開発には3段階があり、80年代には地域住民による小規模な開発、90年代に小規模ビジネスの拡大に加え、外部からの参入が始まり、2000年以降はバンコクなど外部の大規模資本が参入し、国家レベルの観光政策と低価格航空会社の参入で大量の観光客が訪れるようになっていきます。これにより、道路拡大や空港整備などの乱開発、近代的リゾート建築による森林・竹林・温泉などの自然資源の収奪、バンコク風のビジネススタイルの導入による地域色の希薄化などが生じ、地元資本が窮地に立たされている状況が詳細に報告されました。質疑応答では、難民や非合法居住者への観光開発による影響、自然災害で農地を手放した主体に関する質問がありました。

総合討論では、まず司会から、今回の報告にあったキーワードとして「ツーリズム」「移動」に加え、親密圏・公共圏と関わる地域資源や、親密性の「商品化」、それに伴う「公共化」がフィールド調査班全体の視点となるのではないかと、というコメントがありました。質問・コメントとして地域コミュニティと家族の重層性（第一報告）、親密圏の資源としてのとらえ方、グローバルという用語の使用、第二報告に中国系コミュニティと台湾とのつながり、第一報告の炭鉱社会の生活水準、人間の活気と「もの」や「記憶」の関係などがあり、報告に関して先のキーワードに即した部分が深められたように思います。

膨大な「聞き取り」などのデータをまとめていくことは非常に難しく、限られた報告時間の中では一部しかご紹介いただけませんでした。4月の成果報告会などでの今後の公表が期待される研究会でした。

第2回全体研究会参加報告：フィールド研究報告の魅力と今後の課題

一條洋子（農学研究科・博士後期課程）

第一報告の「移動する家族の生活史―旧産炭地を事例として」、および第二報告の「自由化と資源収奪―北タイの村におけるツーリズム活動を事例として―」ともに、調査対象となっている現場の空気が感じられる大変興味深い報告であった。フィールド班の報告ならではのとも言えるこの“現場の空気の伝達”が何によってもたらされていたかと考えた。ひとつは研究または報告手法であり、特に、第一報告ではライフヒストリー研究として人々の記憶の「語り」がそのまま表現されていたこと、第二報告では現地の写真資料が多く用いられていたことにより、具体的な現実が表現されていたためと言える。また両報告とも対象社会を通時的に取り上げていて、その激動と人々の一連の対応が凝縮して提示されたことも“動き”を伝える要素となっていた。これらに加え、研究対象に対する各報告者の気持ちの込められた報告であったことも影響していたように思われる。客観的分析を試みるなかでも、実際に触れた事例地域や人々に対する想いが感じられ、たとえばそれは変化・消滅していく無形の何かを残そうとする意思や姿勢、あるいはそこに生きていた（いる）人々の活気や生活リズムへの共感といった報告者の心情または立ち位置である。これらが感じられたことで、報告者とともに積極的にフィールドに接近したような気分になった。つまり、同調するしないにかかわらず、良い意味で報告に巻き込まれたのである。フィールド調査に基づく研究の魅力を活かすこれらの要素は、今後の研究・報告においても改めて意識してみたい点であった。

内容としても短時間のうちによくまとめられていた両報告を聞いた後、人ごとではなく余計に気になっていることがある。それは各事例の中に登場するアクターの位置づけである。フロアからの質問のいくつかもこの点に収束するように思う。第一報告に登場する、家族、隣人、第一組合員、第二組合員、移住者等の人々、そして第二報告に登場する地元民、大資本家、観光客等の人々は、確かに親密圏と公共圏を再編成していく主人公のように思えるのだが、彼ら/彼女らを全体の中でどう位置付けたらよいのか。客観的には属性や人数で示されうるが、さらには他のアクターの存在やそれらとの関係性も重要となろう。人々の紐帯に分裂や変化が起きた時にそれを戻そうとしたり調和を取ろうとする人、たとえば第一組合と第二組合を繋ごうとする人々や、地元住民と大資本家の双方を共存させようとする人々（旅人？）は居なかったか。また「記憶」の受け取り手はどこに位置づけられるだろうか。どのようなアクターがいかなる役割を演じて再編成の大きな流れを形成していくのか。多様なアクターを認識しつつこれを示すことは、両圏の再編成過程と結果をより詳細に見ることに繋がる。しかし…この課題は親密圏と公共圏の重層性とも相俟って、自らの研究に照らしても重要なが複雑に思え、期間限定のフィールド調査・分析のみでは克服しきれない面も持つ。他班との協力の下、より広く実現されていくことを望みたい。

ともあれ、日本の炭鉱社会とタイの観光地という異なるフィールドを共通に捉えることのできる「親密圏と公共圏の再編成」という研究枠組みに、可能性の大きさをも実感できた、充実した楽しい研究会であった。